

## アジアにおけるフランス革命研究の現状と課題

日・中・韓の研究状況を報告



会場から質問も活発だったシンポジウム

国際シンポジウム「アジアにおけるフランス革命研究の現状と課題」-日本・中国・韓国の研究状況を中心に-(大学院社会知性開発研究センター／歴史学研究センター主催)が3月3日、生田キャンパスで約70人が参加した開催された。

フランス革命が日本、中国、韓国でどのように認識されてきたか、それぞれの研究者が各国

の研究状況を報告。いずれも歴史的状況や政治的状況により独自の歩みを持つことが示された。

まず、日本の現状について遅塚忠躬東京国際大学教授(専門・フランス革命史)が講演。日本における同革命の研究は、1960年代(「安保闘争」時代)を機に、その観点に変化が表れた。同革命がもたらした社会・経済的諸条件の研究から近代日本の政治文化の特質を究明するための、同革命の政治・文化の特質についての研究が盛んになっていると述べた。

中国の研究については、賈曉明専大大学院任期制助手(専門・フランス革命期の英仏外交史)が報告。清朝から今日までの百年の間、翻訳事業の発展過程における特徴を明らかにし、文革終了宣言以降、翻訳される文献も中国研究者の関心も多様化しつつあると指摘した。

最後に、趙景達千葉大学教授(専門・朝鮮近代の民衆運動<思想>史と近代思想史)が韓国の現状について講演。朝鮮でも19世紀末以降、翻訳が大きな役割を果たしてきたが、韓国で特に1987年の民主化宣言以降、自前の研究が活発になっていた過程を語り、さらに甲午農民戦争を、比較史的観点を入れて論じた。

これらを基に、近江吉明同センター研究員を進行役に会場からの質問に答える形でのシンポジウムが展開され、活発な意見交換がなされた。

【ニュース専修3月号10面】

## 1年間のグループワークを披露

ネットワーク情報学部 初の『プロジェクト』科目 発表で多彩な作品披露



1年間の成果を披露するプレゼンテーション

1年間の成果を披露するプレゼンテーション  
させることで創造性、総合的能力の開発、共同作業におけるコミュニケーション能力を養うことを目標としている。

ネットワーク情報学部の「プロジェクト」科目の発表プレゼンテーションとデモンストレーション展示が1月28、29の両日行われ、25グループが1年間の成果を発表した。

同科目は、コース制(ネットワークシステム、コンテンツデザイン、情報ストラテジー)でその基礎を習得した3年次生が、1年間のグループワークによってアイデアを出し、作品を完成さ

同学部は01年度にスタートしたため、今回が1期生による初の発表会実施となった。テーマは、技術重視のものから映像作成、経営分析、産学連携型のものまで多彩。初日のプレゼンテーションのあと、二日目のデモンストレーション展示では、企業や高校など一般からの見学者も多数訪れた。

学生の投票により、「バーチャルコミュニティの作成」を共同で作成した2グループ(香山瑞恵助教授・山下清美教授指導)が最優秀賞に選ばれた。その参加学生から感想を寄せてもらった。

〈赤松真悟くん〉 期間、規模、人数ともに最大のグループワークだったことや、英語の資料を読む 必要があったことなど大変でしたが、非常に良い経験になりました。結果として、多くの人に評価される良いものが出来てよかったです。

〈加部菜摘さん〉 学生17人という大人数でのグループワークで、仕事の分担や個人個人への情報の伝達、作業計画の立て方など反省点もありますが、作業を通じて自分も成長出来たと思います。

〈中島悦子さん〉 グループの中にスペシャリストはいなかったかもしれませんが、両先生をはじめ全員が協力し合ってそれぞれが得意な分野でリーダーシップを発揮することによって最優秀賞を収めることが出来たと思います。

〈山野辺裕くん〉他のグループの発表を見て、どこも素晴らしい成果で、各学生が共通のテーマで各々の力を発揮することにより、学部の可能性が広がっていくことを実感しました。

【ニュース専修3月号10面】

英語の学習10人10話 第10話 簡単なものから、数多く 上原正博(法学部助教授)

このコラムもついに最終回なので、今までに紹介された語学学習のコツをまとめておく。検定試験などをペースメーカー(第1話)にする。お堅い教科書ではなく、洋楽(4話、7話)・洋画(6話)など趣味(3話)を活用して楽しく学ぶことも王道であることがわかった。

また、一気に海外へ飛び出す(9話)のもいい。いずれにせよ、語学の習得には「常時英心」(2話)という姿勢が大切で、常に言葉への知的好奇心を持つことが不可欠となる。その態度を忘れたら、個人の社会的・文化的背景を表すアクセント(5話)があることも知らずに赤恥をかくことになるだろう。

しかし、何よりも大切なのは動機(7話)であり、英語が必要だという明確な目標(8話)であることは確かだ。それがなければ学習は辛く、継続どころか修得は望めない。

今回は簡単な英語で書かれた副読本の乱読を薦めたい。語学力の向上が停滞している人の大半は詰め込むだけで実践的出力をしていない。単熟語も覚えるままで、それが実際に用いられる文脈に出会ったことがなければ、無味乾燥なままだ。まず、中学・高校レベルの英文を数多く読んでみることだ。意外にスラスラと読めてしまうから面白い。面白いから、まだ読める。きつとネ。

LL自習室(神田)にはGraded Readerといって語彙や文法を制限して書かれた副読本が500冊も置いてある。(生田は取り寄せ。)それを週に1冊読んでみたらどうだろう。授業期間だけでも1年で30冊は読める。1冊40頁程度だから、1,200頁も読むことになる。これだけ読むとかなりの自信がつく。自信がつくと学習に弾みがつく。弾みがつくと目標も見えてくるはずだ。(おわり)